

”挑戦”の先に 見えるもの

「“挑戦”の先に見えるもの」は、瀬戸内国際芸術祭に関わる人たちの姿に光をあて、その挑戦の歩みをたどる連載企画です。



なぜ、私たちはこの企画に挑むのか

日本総陞はこれまで、法人向けのリスクマネジメント事業に取り組んできました。その本質は、「挑戦する心を止めずに、安心して一步を踏み出せる環境をつくる」ことだと考えています。

私たちが向き合っているのは、リスクそのものではなく、その先にある“挑戦”です。誰かが前に進もうとする姿に、私たち自身も力をもらってきました。

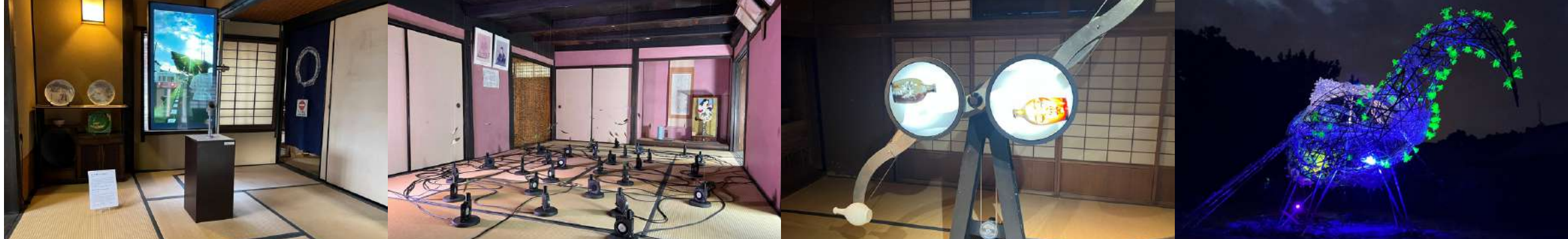
挑戦を応援する会社として、その現場で生まれる物語を社会に届けていきたい——そんな思いから、この企画を始めました。

瀬戸内国際芸術祭の会場でも、アートに関わる人、島で暮らす人、遠くから訪れる人など、それぞれが自分の想いを胸に、“挑戦”しています。私たちは、作品そのものではなく、その背景で動いている“人”の挑戦に目を向け、現場で出会った“挑戦する人”たちの日常や気持ちを、記録し伝えていきます。

シリーズ第6回となる今回も、引き続き志度（しど）・津田（つた）エリアを追いかけます。

穏やかな海と風が印象的だった津田をあとにして、次は志度のまちへ。同じ瀬戸内の風を受けながらも、津田とはまた少し違った表情の時間が流れていました。今回はそんな志度のまちで出会った、本間さんの挑戦をお届けします。

津田エリアの取材を終え、次に向かった志度のまち。四国通路86番の志度寺や、さぬき市志度出身の江戸時代の発明家・平賀源内に関係する資料館などがあり、歴史文化の香りが息づいています。2025年の瀬戸内国際芸術祭（以下、瀬戸芸）の作品も、資料館や古民家を活用した展示が行われており、巡るたびにどこか懐かしい時間が流れるような、歴史とアートが溶け合う様子がありました。



趣のある建物や、寺院の敷地を活用して展示された作品の数々。作品を楽しみながら、志度の歴史に触れることができる。各作品の詳細は最後に紹介。（左から、①～④とする）

■門前町を彩る「源内ランタン」

そんなまち歩きの中で、いたるところで、渋い雰囲気ランタンが目にとまります。



実は濱岡さんへの取材の中で、“志度も津田エリアも、夜の動線を整えるために足元を照らす誘導灯やライトアップを設置していて、志度には「源内ランタン」という文化がある”と伺っていました。

源内ランタンとは、平賀源内にちなんだ明かり。平賀源内が秋田の鉱山技術指導に訪れた際、熱気球の原理を応用した紙風船（＝ランタン）を現地の人々に伝え、遊びとして広めたことが「源内ランタン」の起源とされています。

通りに置かれた源内ランタンには、古い商店の屋号や浮世絵のような模様が描かれていました。これらは、かつて商店がお得意様に配っていた「引札（ひきふだ）」と呼ばれるものがもともになっています。

引札はチラシの元祖ともいわれ、年末年始のご挨拶代わりに配られていた浮世絵柄の紙。平賀源内が齒磨き粉の口上（セールストーク）を文字だけの引札にして発行したという記録も残っており、志度では明治から大正にかけて活用されていました。源内ランタンの図柄には、実際に配られていた引札のデザインを使用しているそうです。

「各家庭の皆さんにもランタンを配り、時間になると家の前に出してくださいとお願いしていて、それが誘導灯の役割を果たしています。まち全体が柔らかな光でつながるようで、すごくきれいですよ。」

そう語ってくれた濱岡さんの言葉を思い出しながら散策を続けていると、ランタンを点検するように歩く男性の姿が目に入りました。

■光でまちをつなぐ人

点灯時間に向けてランタンを一つ一つ確認されていたのは、本間立治（ほんまたつはる）さん。芸術祭における「源内ランタン」設置の取り組みを中心になって進めてきた方です。

「もともとは『源内バル』というイベントがあっただけ。そのイベントでは、志度駅から志度寺の道中に源内ランタンを置いていた。それを、もう少し設置する範囲を広げて芸術祭中も置いてみたらどうか、と提案したのがきっかけなんです。」

なんと偶然にも、発案者自らランタンを設置されていたときにお会いした、というわけです！



本間さん。連合自治会志度支会に所属し、地域の発展を長年サポートしてこられた。補強修復のため回収していたランタンを設置されていたところに遭遇。新たな破壊が無いかも確認しながら巡られており、その細やかな対応には「来場者に綺麗なランタンを見て欲しい」という想いが現れているように思えた。

この源内ランタンの取り組みを行うことに伴って、まちに起きた協力の輪のお話もしていただきました。

「志度には、秋季例大祭の際に上がる大行燈（おおあんどん）という伝統があるのだけど、大行燈の管理をしている人たちが、『ランタンするなら、大行燈も一緒にあげようか！』と賛同してくれて。ここから先、志度寺までの間にいくつか上がっています。特別お頼みもしていなかったのに、関わる人たちの心意気で実現しました。」

それから今回、中学生に協力してもらって制作した、手書きイラストを活用したランタンもあるんです。校長先生も『せっかくの機会に子どもたちが関わるのは良いことだから、ぜひやりましょう』と言ってくれました。美術部の子たちが、15作品を書いてくれました。そこに、さぬき市に関係するキャラクターが組み合わさってランタンになっています。色々違いがあるので、そこも楽しんで貰えたら。」



志度中学校の中学生が制作したイラストが使われた源内ランタン。平賀源内記念館近くの通りを中心に設置されており、引札ランタンとはまた違った彩りが賑やかさを生んでいた。

本間さんは自治会長をされる以前から、地域の組織に所属されていたそう。その活動の中で出来た縁が、子どもたちにも協力をお願いしようという気付きに繋がったと教えてくれました。

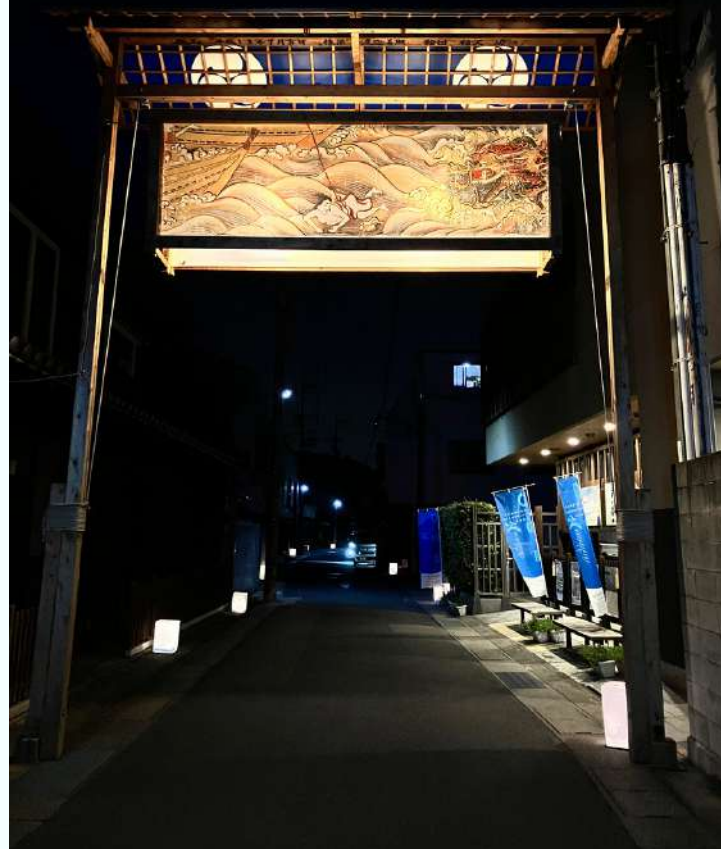
本間さんが協力をお願いしたのは、中学生だけではなく、小学校や幼稚園では、子どもたちが折り紙で飾りを作ってくれたそうで、それらは”ご自由にお持ち帰りください”という形で休憩所等に配置。あっという間に無くなっていき、来場者から「もう無いんですか？」と問い合わせが起きることもあったそうです。

高校生はパンフレット。中学生はランタン。小学生や幼稚園の子どもたちは折り紙。本間さんの働きかけも一つのきっかけとなって、様々な形で子どもたちの参加が実現しました。そこには、より一層地域が一体となり、芸術祭が盛り上がっていく姿がありました。

■静かに広がる挑戦

やがて日が暮ればはじめ、通りのあちこちに並んだ源内ランタンに、そして大行燈にもゆっくりと灯りがとまります。

カラフルな源内ランタンの灯りが地をつなぎ、大行燈が空を照らします。大小の光が呼応するように、志度の夜が立体的に広がっていきました。



どの光にも、それぞれの“挑戦”が宿っています。

「やってみよう」と声を上げた本間さん。その思いに応え、ランタンに絵を書いた子どもたち。大行燈を上げようと賛同した地域の人たち。それぞれの挑戦がそれぞれの形で動き出し、その積み重ねが、志度の夜をつくっていました。

誰かの挑戦が、次の挑戦を呼び起こす。それは派手な出来事ではなく、日常の中で静かに続いていく連鎖です。

光に包まれた通りを歩きながら、まち全体が少しずつ前へ進んでいるように感じました。

< 作品紹介 >

① 寛康明「Echoes as Air Flows」
息を吹きかけると、画面の向こうでシャボン玉となって空に舞い上がるオンラインインスタレーション作品。平賀源内旧邸で展示され、琴電志度駅や地藏寺など、エリア内の離れた空間をつなぐ。

② 寛康明「Echoes as Air Flows」
平賀源内ゆかりの植物・ホルトノキの葉を素材に、コンピュータ制御された気流に乗せて舞い上がらせたインスタレーション作品。窓辺に設置されたセンサーが室内に吹き込む風の流れを感知すると、葉が様々な動きを見せる。

① 同様に鑑賞者が息を吹き込むことで、新たな気流を生み出すことも可能。

③ ニール・メンドーザ「合成されし魂」
日本の民間信仰「付喪神（つくもがみ：長く使われた道具や物に魂が宿するという考え方）」に着想を得た作品。地域住民から集められた廃棄寸前の古道具やガラス瓶などを用い、AI技術との融合で“その時の場所”で新たな付喪神＝魂を生み出し続ける。展示場所がかつて造り酒屋だった古民家であることも、作品の世界観を際立たせる。

④ リーロイ・ニュー「メブヤンの balan gay（メブヤンの船または聖域）」
作家の出身地であるフィリピンの先住民神話の女神が導く「聖なる船」をモチーフに、志度寺にて展示された。さぬき市で回収された竹と破損ボトルが材料に使用され、環境問題、そして今後の未来をどう切り開いていくのかをテーマとした作品。志度に伝わる「海女の玉取り伝説」等からも着想し、「土地・神話・共同体（balan gay＝フィリピン語で“共同体”）」の概念を重ねている。

いずれの作品も、志度エリアにて瀬戸内国際芸術祭2025の夏会期で展示された。

※画像：瀬戸内国際芸術祭2025 出展作品／撮影：日本総陞

※本画像の無断転載・二次利用はご遠慮ください